

『表現学』第八号 令和四(二〇二二)年二月五日 抜刷  
大正大学表現学部表現文化学科

## 『トニー滝谷』の本文改訂(九)

―シヨート・ロング両ヴァージョンの前半場面の描写―

森 晴彦



# 『トニー滝谷』の本文改訂(九)

— ショート・ロング両ヴァージョンの前半場面の描写 —

森 晴彦

はじめに

村上春樹『トニー滝谷』の本文異同についての考察を続け(①、前稿では、ショート・ヴァージョン(『文藝春秋』b・1、『文藝春秋短篇小説館』b・2)と、ロング・ヴァージョンc・1『村上春樹全作品1979～1989⑧』(平三、講談社。以下『全作品⑧』)と略称)、そこから五箇所七九個の削除改訂を施すロング・ヴァージョンc・2・3(単行本『レキシントンの幽霊』平成八年、文庫本『レキシントンの幽霊』平成一年)におけるアシスタント応募女性の描写の改訂について考察したが、本稿では前半場面ですべて言及しなかったトニー滝谷の描写について指摘しておくとするものである。旧稿でも示したが、本稿でも『トニー滝谷』の本文の分類について以下に簡便に示しておく。

- (a) ロング・ヴァージョン
- ・ 未発表
- (b) ショート・ヴァージョン
- ・ 『文藝春秋』六八巻七号、平成二年六月(b・1)
- ・ 『文藝春秋短篇小説館』平成二年九月(b・2)
- (c) ロング・ヴァージョン
- ・ 『村上春樹全作品1979～1989⑧』平成三年七月(c・1)
- ・ 単行本『レキシントンの幽霊』平成八年一月(c・2)
- ・ 文庫本『レキシントンの幽霊』平成二年一月(c・3)

本稿では、ショート・ヴァージョンと、ロング・ヴァージョンc・1(『全作品⑧』)、ロング・ヴァージョンc・2・3(単行本・文庫本『レキシントンの幽霊』)の本文を比較し、増補訂や削除を中心とした本文異同を指摘・考察し、創作過程論上、特記せねばならないことなどを指摘していこうとするものである。本文への記号は、概ね以下の方針で付している。

(b・1・2) ショート・ヴァージョンにあるもロング・ヴァージョンc・1(『全作品⑧』)で削除された箇所を[ ]で囲み示した。両ヴァージョン間で異同がある箇所には傍線を付した。『全作品⑧』(c・1)にあるが『レキシントンの幽霊』単行本(c・2)文庫本(c・3)で削除された箇所は[ ]で囲んだ。ヴァージョン間で異同がある箇所や改訂、単行本・文庫本で新たに挿入された文言に傍線を付した。

## 前半におけるトニー滝谷関係の描写

『トニー滝谷』の書き出しは、どのヴァージョンも「トニー滝谷の名前は、本当にトニー滝谷だった。」から始まる。続けて、

(b・1・2) ショート・ヴァージョン

彼はその名前(戸籍上の名前はもちろん滝谷トニーとなっているわけだが)と、縮れた髪の毛のせいで、子供の頃にはよく混血児と間違えられたものだった。アメリカ兵の血が半分混じっているのだろうと。しかし実際には、彼の父も母も、れっきとした日本人だった。

(c1・2・3) ロング・ヴァージョン (全作品⑧) 単行本・文庫本

彼はその名前(戸籍上の名前はもちろん滝谷トニーとなっているわけだが)と、いくぶん彫りの深い顔立ちと、縮れた髪の毛のせいで、子供の頃にはよく混血児と間違えられたものだった。戦後間もないころだったから、世間にはアメリカ兵の血が半分混じっている子供たちが数多くいたのだ。しかし実際には、彼の父も母も、れっきとした日本人だった。

ショート・ヴァージョンでは、トニー滝谷自身にアメリカ兵の血が混じっていると間違えられた、と読めてしまうが、ロング・ヴァージョンでは、いくぶん彫りの深い顔立ちと縮れ毛のために混血児と間違えられた。なにしろ当時はアメリカ兵との間の混血児が数多くいたからさ、という調子に書き改められている。下線の部分が追加された箇所である。

この後、父親である滝谷省三郎の説明に入るのだが、トニー滝谷の父省三郎については、「上海関係に関する描写」と限定して旧稿を立項した関係でそこですでに触れてきたが<sup>②</sup>、次の箇所は帰国直後となるため言及していないので、ここで指摘をしたい。

(b1・2)、(c1・2・3)とも

滝谷省三郎がげっそりと痩せこけて身ひとつで日本に帰ってきたのは、昭和二十一年の春だった。帰ってみると、東京の実家は前年三月の東京大空襲で焼け落ちて、両親はその時に亡くなっていた。ただ一人の兄はビルマの戦線で行方不明のままだった。つまり滝谷省三郎はまったく天涯孤独の身になったわけだ。しかし彼はそのことをそれほど悲しいとも切ないとも感じなかったし、とくにショックも受けなかった。

と同文ですべてのヴァージョンにあり、次の「もちろん……」に続く箇所である。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

もちろん欠落感のようなものはあった。しかし人間が生きていくというのは多かれ少なかれそういうものなのだろうと彼は思った。どのみち人はいつかひとりぼっちになってしまうものなのだ。

(c1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

もちろん欠落感のようなものはあった。しかし人間が生きていくというのは多かれ少なかれそういうものなののだ。彼はそのとき三十歳になっていた。ひとりぼ

ちになつてしまうものなのだ。彼は思った。どのみち人はいつかひとりぼ

ちになつたからといって誰かに文句の言えるような歳でもない。彼はいくつかまとめて年をとつたような気がした。でもそれだけだった。それ以上の感情はとくに湧いてこなかった。

(c2・3) ロング・ヴァージョン (単行本・文庫本)

もちろん欠落感のようなものはあった。しかしどのみち人はいつかひとりぼちになつてしまうものなのだ。ひとりぼちになつたからといって誰かに文句の言えるような歳でもない。いくつかまとめて年をとつたような気がした。でもそれだけだった。それ以上の感情はとくに湧いてこなかった。

ショート・ヴァージョンから(c1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧) に継承された「人間が生きていくというのは多かれ少なかれそういうものだろうと彼は思った」を、(c2・3) ロング・ヴァージョン (単行本・文庫本) では削除する。

(c1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧) が「彼はそのとき三十歳になっていた」と省三郎の年齢を定位しているにも関わらず、わざわざ(c2・3) ロング・ヴァージョン (単行本・文庫本) では削除している。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

彼の父親は滝谷省三郎という、戦前から少しは名を知られたジャズ・トロンボーン吹きだった。しかし戦争が始まる三年前に、ちよつとした面倒を起こして東京を離れなくてはならなくなり、どうせ離れるならということと中国にわたつた。そして日中戦争から真珠湾攻撃、そして原爆投下へと到る戦乱激動の時代を、上海や大連のナイトクラブで気楽にトロンボーンを吹いて過こした。戦争は彼とは関係のない場所で行われていた。

(c1・2・3) ロング・ヴァージョン (全作品⑧) (単行本・文庫本)

彼の父親は滝谷省三郎という、戦前から少しは名を知られたジャズ・トロンボーン吹きだった。しかし太平洋戦争が始まる四年ばかり前に、女の絡んだ面倒を起こして東京を離れなくてはならなくなり、どうせ離れるならということと楽器ひとつを持って中国にわたつた。その当時、長崎から一日船に乗れば上海に着いた。

彼は東京にも日本にも、失つて困るようなものを一切持ちあわせなかった。だから未練の持ちようもなかった。それにどちらかといえはその当時の上海という街が提供する技巧的なあでやかさの方が彼の性格にはよくあつていたようだった。揚子江を遡る船のデッキに立ち朝の光に輝く上海の優美な街並を目にしたときから、滝谷省三郎はこの街がすっかり気に入ってしまった。その光は彼にひどく明るい何かを約束しているように見えた。彼はそのとき二十一歳だった。

ここに「二十一歳」という記述があり、省三郎の年齢が示されているのだが、(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧) で定位置した「昭和二十一年春帰国、二十歳」を、(c-2・3) ロング・ヴァージョン (単行本・文庫本) でわざわざ削除する必要はないように思われる。

なお、「太平洋戦争が始まる四年ばかり前に二十一歳」というc-1・2・3 ロング・ヴァージョンの記述からだと言三郎は「大正五ないしは六年生まれ」と比定されるが、(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧) は「昭和二十一年春帰国、二十歳」だと、生年は「大正五年」と割り出すことが出来るだけに、全作品⑧の表現を削除する必要があったのだろうかと思わされる箇所でもある。

次は、トニー滝谷の母親の急死に続く場面である。「登場女性に関する描写(1)」で示したが③、

(b-1・2) ショート・ヴァージョン

結婚した翌年には男の子が生まれた。子供が生まれた三日後に母親は死んだ。あつという間に彼女は死んで、あつという間に焼かれてしまった。非常に静かな死に方だった。何の葛藤もなく、苦しみらしい苦しみもなく、すうっと消えているように死んでしまったのだ。まるで誰かが裏側でこつそりとスイッチを切ったみたい。

(c-1・2・3) ロング・ヴァージョン (全作品⑧) (単行本・文庫本)

結婚した翌年には男の子が生まれた。子供が生まれた三日後に母親は死んだ。あつという間に彼女は死んで、あつという間に焼かれてしまった。非常に静かな死に方だった。何の葛藤もなく、苦しみらしい苦しみもなく、すうっと消えているように死んでしまったのだ。誰かが裏にまわってそつとスイッチを切ったみたい。に続く描写である。

(b-1・2) ショート・ヴァージョン

なし

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

滝谷省三郎はそれについていったいどう感じればいいのか、自分でもよくわからなかった。彼はそういう感情に対して不案内だったのだ。彼は死というものをうまく的確に捉えることができなかった。その死が自分にもたらすものを推測し、判断することができなかった。彼にできるのは、それを既成の事実としてそのまま呑み込んでしまうことだけだった。その結果、何か平板な、円盤のようなものがすっぽりと胸の中に入っているような気がした。しかしそれがどういふ種類の物体で、どうしてそこにあるのか、彼にはさっぱり理解できなかった。ただその物体はずつとそこにあつて、彼がそれ以上何かを深く考えることを阻止していた。そんなわけで、滝谷省三郎はそれから一週間ばかり、ほとんど何ひとつものを考えずに過ごした。病院に預けっぱなしになった子供のことさえ思い出せなかったくらいだった。

(c-2・3) ロング・ヴァージョン (単行本・文庫本)

滝谷省三郎はそれについて一体どう感じればいいのか、自分でもよくわからなかった。彼はそういう感情に対して不案内だったのだ。何か平板な、円盤のようなものがすっぽりと胸の中に入っているような気がした。しかしそれがどういふ種類の物体で、どうしてそこにあるのか、彼にはさっぱり理解できなかった。ただその物体はずつとそこにあつて、彼がそれ以上何かを深く考えることを阻止していた。そんなわけで、滝谷省三郎はそれから一週間ばかり、ほとんど何ひとつものを考えずに過ごした。病院に預けっぱなしになった子供のことさえ思い出せなかったくらいだった。

ロング・ヴァージョンでは、親身になってくれる少佐の描写の前に、放心状態に近い省三郎を置き、少佐のアドバイスや名付け親に至る経緯を自然な流れになるように増補しているわけである。次にあるように「そんな彼を」少佐が親身になって慰めてくれるのだが、ショート・ヴァージョンの流れだと、結婚・出産・急死に翻弄された「彼」のだが、ロング・ヴァージョンによって、短時日で目まぐるしく変転する人生に翻弄され、なにをしてよいかもわからない、それ以上何かを深く考えることを阻

止されている「彼」であることが判る増補になっている。なお、省三郎にとつての死について摺み損ねているために妻の死を量りかねているくだが（c1-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）では記されたのに、（c2-3）ロング・ヴァージョン（単行本・文庫本）では潔くカットしているのが囲みの箇所である。結果としてテキストの上からは「死」は排除され、誰かが裏にまわってそつとスイッチを切ったみたいに消えた妻の死から拡大され、残された省三郎の内面がフォーカスされることになる。

#### （b1-2）ショート・ヴァージョン

少佐はそんな彼を親身になって慰めてくれた。毎日のように二人は基地のバーで酒を飲んだ。いかお前はもつとしっかりしなきゃならんぞ。子供だけはきちんと育てるんだぞ、と少佐は彼に強く言った。それから少佐はふと思いついたように、もしよかつたら自分がその子供の名付け親になってやろうと申し出た。そう、考えてみれば彼はまだ子供の名前さえつけていなかったのだ。

#### （c1-2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本・文庫本）

少佐はそんな彼を親身になって慰めてくれた。毎日のように二人は基地のバーで酒を飲んだ。いかお前はもつとしっかりしなきゃならんぞ。何があつても子供だけはきちんと育てるんだぞ、と少佐は彼に強く言った。少佐がいつたい何を言つてるのか分からなかつたが彼は黙って肯いていた。彼にも相手の好意だけは理解することができたのだ。それから少佐はふと思いついたように、もしよかつたら自分がその子供の名付け親になってやろうと申し出た。そう、考えてみれば瀧谷省三郎はまだ子供の名前さえつけていなかったのだ。

ショート・ヴァージョンは単なる思い付きのように解されるくらいがあつたが、ロング・ヴァージョンでは、言っている意味はわからずとも好意だけは理解できた、という長い英語による少佐の力づける行為を入れた上で、そつと名前をつけてやろう、に結び付くような展開を増補によって与えている。

#### （b1-2）ショート・ヴァージョン

少佐は自分のファースト・ネームであるトニーという名前をその子につければいいと言つた。トニーという名前が日本の子供の名前としてはふさわしいかどうか

という疑問は、彼の頭をよぎりもしなかつたようだ。滝谷省三郎は家に帰ると紙に「滝谷トニー」という名前を書いて壁に貼り、それを毎日じつと眺めていた。悪くないじゃないか、と滝谷省三郎は何日か後に思った。これからはしばらくアメリカの時代が続くだろうし、息子にアメリカ風の名前をつけておいたほうが何かと便利かもしれない。

#### （c1-2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（単行本・文庫本）

少佐は自分のファースト・ネームであるトニーという名前をその子につければいいと言つた。トニーという名前はどうか考えても日本の子供の名前としてはふさわしいものではなかつたけれど、それがふさわしい名前かどうかなどという疑問は、少佐の頭には一瞬たりとも浮かばなかつたようだった。滝谷省三郎は家に帰ると紙に「滝谷トニー」という名前を書いて壁に貼り、それを何日か眺めていた。滝谷トニー、悪くないじゃないか、と滝谷省三郎は思った。これからはしばらくアメリカの時代が続くだろうし、息子にアメリカ風の名前をつけておくのも何かと便利であるかもしれない。

ショート・ヴァージョンの方が「毎日じつと眺めていた」があるので、真剣に対峙している観が強いが、省三郎の性格としてはロング・ヴァージョンの方が適しているか。ちなみに、ショート・ヴァージョンでは、直前の子どもにまだ名前の付けていない「彼」が省三郎で、続くこの名付け親の「彼」が少佐なので、近接する二人の「彼」を区別する意味で、改訂したロング・ヴァージョンの表記の方がいい。

次の場面は、番外編とした旧稿<sup>(4)</sup>で触れたが、ショート・ヴァージョンは対比させていないのと、解説は異なるので、あらためて考察したい。

#### （b1-2）ショート・ヴァージョン

しかしそんな名前をつけられた子供にとつて、人生は決して安楽なバラの寝床ではなかつた。学校では混血とからかわれたし、彼が名前を名乗ると相手は妙な顔をするか、あるいはちよつと嫌な顔をした。多くの人はそれを悪い冗談のようなものに取つたし、中には腹を立てる人間さえいた。

#### （c1-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

しかしそんな名前をつけられた子供にとつて、人生は決して安楽なバラの寢床ではなかった。学校では混血とからかわれたし、彼が名前を名乗ると相手は妙な顔をするか、あるいはちよつと嫌な顔をした。多くの人はそれを悪い冗談のようなものにとつたし、中には腹を立てる人間さえいた。ある種の人々はそんな名前を持った子供を前にしただけで、古い傷口をあばかれたような気にもなった。

(c-2・3) ロング・ヴァージョン (単行本・文庫本)

しかしそんな名前をつけられたおかげで学校では混血とからかわれたし、彼が名前を名乗ると相手は妙な顔をするか、あるいはちよつと嫌な顔をした。多くの人はその悪い冗談のようなものにとつたし、中には腹を立てる人間さえいた。

これは、トニー滝谷がその名前から苦勞する場面である。囲みはc・2・3『レキシントンの幽霊』単行本・文庫本でカットされる箇所である。ショート・ヴァージョンからc・1全作品⑧のロング・ヴァージョンに受け継がれた「しかしそんな名前をつけられた子供にとつて、人生は決して安楽なバラの寢床ではなかった」は、その一文で待遇が察知できる名文なのだが、c・2・3のロング・ヴァージョンではカットされるわけである。「おかげで」の背後にすべて沈めてしまったわけである。

トニー滝谷の受難は(多少の彫の深い顔立ちと縮れ毛と)ハーフめいた名前からで、囲みでカットした箇所には、戦後問題化したG Iベビー等への蔑視も含まれてくる。ただ、c・1全作品⑧のロング・ヴァージョンでは意を尽くし過ぎたために、それがゆえにc・2・3では書き過ぎをカットしているのであろう。『わが国の教育の現状(昭和二八年度)』(文部省、昭二八・一二)第三章第一節五には、厚生省の二八年四月現在の調査による混血児童は四〇〇〇名、二八年四月の小学校入学者は四三〇名と示されている。村上はc・1全作品⑧で増補しつつも最終的にはc・2・3で「ある種の人々はそんな名前を持った子供を前にしただけで、古い傷口をあばかれたような気にもなった」と記した「古い傷口」に象徴した負の要素をカットしたわけである。

(b-1・2) ショート・ヴァージョン

物心ついた時から父親はしよつちゆう楽団を率いて演奏旅行に出ている。幼い頃は通いの家政婦が彼の面倒を見てくれたが、小学校も上の学年になると、彼は何でもひとりでこなすようになった。ひとりで料理を作り、ひとりで戸締りをして、

ひとりで眠った。とくに寂しいとも思わなかった。

(c-1・2・3) ロング・ヴァージョン (全作品⑧) (単行本・文庫本)

物心ついた時から父親はしよつちゆう楽団を率いて演奏旅行に出ている。幼い頃は通いの家政婦が彼の面倒を見てくれたが、小学校も上の学年になると、彼は何でも一人でこなすようになった。ひとりで料理を作り、ひとりで戸締りをして、ひとりで眠った。とくに寂しいとは思わなかった。誰かにあれやこれや構つてもらうよりは、自分でやったほうがずつと気が楽だった。

孤独なトニー滝谷が、その自立性を子どもの時から獲得していることを示している箇所。ロング・ヴァージョンは、ひとりがいかに良くてマイペースであるかを補強する意味合いでの挿入である。

孤独なトニー滝谷は、絵を描くことが好きだった。その描写について旧稿⑤で示したことがある。再掲しておく。

(b-1・2) ショート・ヴァージョン

鉛筆の先を針のように尖らせて、自転車やラジオやエンジンやら、そういうものの細部をとことん細かく描くのが得意だった。花の絵を描いても、葉脈の一本一本まで克明に描いた。彼にはそういう描き方しかできなかったのだ。

(c-1・2・3) ロング・ヴァージョン (全作品⑧) (単行本・文庫本)

鉛筆の先を針のように尖らせて、自転車やラジオやエンジンやら、そういうものの細部を克明に描くのが得意だった。花の絵を描いても、葉脈の一本一本までこと細かに描いた。誰になんと言われようと、彼にはそういう描き方しかできなかったのだ。

この箇所は、『全作品⑧』も『レキシントンの幽霊』のロング・ヴァージョンでは異なるので旧稿「本文異同一覧」では末尾に紹介したが、ショート・ヴァージョンでの描写を、さらに精密画に対するトニー滝谷の強い意志についてロング・ヴァージョンで増補した箇所である。「とことん細かく描く」を「克明に描く」に変え、「一本一本まで克明に描いた」を「一本一本までこと細かに描いた」に改訂している。ここ

のところがチェンジは、強い拘泥が感じられるところである。続けて、全ヴァージョン「他の学科の成績はあまりぱつとしなかったが、図画・美術の成績だけはいつも飛び抜けて良かった。コンクールがあればたいい一等賞を取

った」とあり、次の美術大学進学に続くのである。

(b-1・2) ショート・ヴァージョン

そんなわけで、彼が高校を出て美術大学に入り(大学に入った年から父と子は、どちらが言い出すともなく当然のことにように、別々に暮らすようになった)、イラストレーターになったのも自然のなりゆきだった。実際の話、彼にはそれ以外の道の選びようもなかったのだ。彼の描く絵は芸術からはかなり遠い地点にあるものだったので、美術大学における評価は決して高いものではなかった。

(c-1) ロング・ヴァージョン (全作品⑧)

そんなわけで、彼が高校を出て美術大学に入り(大学に入った年から父と子は、どちらが言い出すともなく当然のことにように、別々に暮らすようになった)、イラストレーターになったのも自然のなりゆきだった。実際の話、それ以外の可能性を考慮する必要もなかった。まわりの青年たちが悩み、模索し、苦しんでいるあいだ、彼は何も考えることなく黙々と精密でメカニクな絵を描き続けた。それは青年たちが権威や体制に対して切実に暴力的に反抗していた時代であったから、その極めて実際の絵を評価するような人間は彼の周囲にほとんど存在しなかった。美術大学の教師たちは彼の描いた絵を見ると苦笑した。クラスメイトたちはその無思想性を批判した。しかしトニー滝谷にはクラスメイトたちが描く「思想性のある絵のどこがいいのかさっぱり理解できなかった。彼の目から見れば、それらはただ未熟で醜く、不正確なだけだった。

(c-2・3) ロング・ヴァージョン (単行本・文庫本)

そんなわけで、彼が高校を出て美術大学に入り(大学に入った年から父と子は、どちらが言い出すともなく当然のことにように、別々に暮らすようになった)、イラストレーターになったのも自然のなりゆきだった。実際の話、それ以外の可能性を考慮する必要はなかった。まわりの青年たちが悩み、模索し、苦しんでいるあいだ、彼は何も考えることなく黙々と精密でメカニクな絵を描き続けた。それは青年たちが権威や体制に対して切実に暴力的に反抗していた時代であったから、彼の描く極めて実際の絵を評価するような人間は周囲にほとんど存在しなかった。美術大学の教師たちは彼の描いた絵を見ると苦笑した。クラスメイトたちはその無思想性を批判した。しかしトニー滝谷にはクラスメイトたちが描く「思

想性のある」絵のどこに価値があるのかさっぱり理解できなかった。彼の目から見れば、それらはただ未熟で醜く、不正確なだけだった。

ショート・ヴァージョンの「彼の描く絵は芸術からはかなり遠い地点にあるものだった」と「美術大学における評価は決して高いものではなかった」を二つブロックに分けて詳解する増補となっている。「芸術から遠い地点」とはトニーの写実性に収斂されていく。「細部をとことん細かく、克明に」描くことしかできないことはショート・ヴァージョンで定位されていたので、「黙々と精密でメカニクな絵を描く」ことが増補されている。ショート・ヴァージョンの問題は、精密な写実技法を芸術から遠い地点のものと定位したところにあり、そこはロング・ヴァージョンではカットされていく。もともと写実に対して価値判断を付与する必要はなく、ロング・ヴァージョンでは割愛されている。ただ、「無思想性」という批判を配置して代替している。そして「青年たちが権威や体制に対して切実に暴力的に反抗していた時代」あり、彼らの言うその思想性の具現化としての芸術に対して、トニー滝谷は価値を見いだせない、と定位しているところはいろいろな意味で興味深い。ショート・ヴァージョンの場合、トニー滝谷の描く絵が美大で評価は高いものではなかったというアバウトなものであるのに対し、ロング・ヴァージョンではこのように学生と教員に分岐させてもいるわけである。

(b-1・2) ショート・ヴァージョン

しかし彼の腕はきわめて実践的だった。トニー滝谷は最初から仕事には不自由しなかった。芸術性はともかく、複雑な機械を彼ほど克明に描ける人物は誰一人としていなかったのだ。「実物を見るよりリアルだ」とみんなは口を揃えて言った。彼の描く絵は写真に撮るよりも正確であり、どんな説明の言葉をつくすよりもわかりやすかった。彼はあつという間にひっぱりだこのイラストレーターになった。自動車雑誌の表紙の絵から、広告のイラストまで、彼はメカニズムに関する仕事なら何でも引き受けた。仕事をするのは楽しかったし、良い金にもなった。

(c-1・2・3) ロング・ヴァージョン (全作品⑧) (単行本・文庫本)

しかしいつたん大学を卒業すると、事情はがらりと変わった。その極めて実践的



な技術と、現実的な有用性のおかげで、トニー滝谷は最初から仕事には不自由ななかった。複雑な機械や建築物を彼ほど克明に描ける人物は誰一人としていなかったからだ。「実物を見るよりリアルだ」とみんな口を揃えて言った。彼の描く絵は写真に撮るよりも正確であり、どんな説明の言葉を尽くすよりもわかりやすかった。彼はあつという間にひっぱりだこのイラストレーターになった。自動車雑誌の表紙の絵から、広告のイラストまで、彼はメカニズムに関する仕事なら何でも引き受けた。仕事をするのは楽しかったし、良い金にもなった。

ここはショート・ヴァージョンの「トニー滝谷は最初から仕事には不自由ななかった」から、ロング・ヴァージョンでは「しかしいったん大学を卒業すると、事情はがりりと変わった」と一転する状況にしている。ショート・ヴァージョンでの写真に対する低評価からくる「芸術性はともかく」という文言は削除されていく。「複雑な機械」だけでなく「建造物」も追加されている。

既に旧稿<sup>⑥</sup>で次の箇所については指摘したが、この後に続くのが「俺はおそらく一生結婚しないだろうと彼は思った」(ショート・ヴァージョン)「彼には何かを相談したり……」(ロング・ヴァージョン)の場面である。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

トニー滝谷はそれまでに何人かの女とつきあった。若い頃、短い期間ではあったけれど、一緒に暮らしたこともあった。しかし結婚を考えたことは一度もなかった。結婚する必要がなかったのだ。大抵の家事は自分でやれたし、あとのことは通いの家政婦が片づけてくれた。一人て眠る方が気楽だったし、子供を欲しいと思つたこともなかった。

(c1・2・3) ロング・ヴァージョン (全作品<sup>⑧</sup>) (単行本・文庫本)

トニー滝谷はそれまでに何人かの女とつきあった。若い頃、短い期間ではあったけれど、一緒に暮らしたこともあった。しかし結婚を考えたことは一度もなかった。結婚する必要性というものをとくに感じなかったのだ。料理も掃除も洗濯も全部自分でやったし、仕事が忙しいときには契約制の家政婦を呼ばよかつた。子供を欲しいと思つたことは一度もなかった。として次に続くわけである。

(b1・2) ショート・ヴァージョン

俺はおそらく一生結婚しないだろうと彼は思った。

(c1・2・3) ロング・ヴァージョン (全作品<sup>⑧</sup>) (単行本・文庫本)

彼には何かを相談したり、気持ち打ち明けたりすることのできる親しい友人もいなかった。一緒に酒を飲む相手さえいなかった。とはいっても、彼は決して偏屈な人間ではなかった。父親ほど愛想はよくないにせよ、日常的にはごく普通にまわりの人たちとつきあうことはできた。彼は威張らなかつたし、自慢もしなかつた。自己弁護もしなかつたし、他人の悪口も言わなかつた。自分のことを喋るよりは、他人の話聞くことの方を好んだ。だからまわりにいる大抵の人々は彼のことを好いてくれた。しかし彼には誰かと現実的なレベルを越えた人間関係を結ぶということがどうしてもできなかった。父親とは何かの用事で二年か三年に一度くらい顔をあわせるだけだった。顔をあわせても、用事が済んでしまうと、二人のあいだにはそれ以上とくに話すべきことはなかつた。トニー滝谷の人生はかくのごとく静かに穏やかに過ぎて行つた。俺はおそらくこの先結婚することはない、と彼は思った。

ロング・ヴァージョンの大幅な増補は、トニー滝谷がいかに孤独を好み、一人で過ごしている方が楽である人物かを強調している。日常生活でもいかに一人で大丈夫かが強調されている。

そしてこれらは、次に突然恋に落ちるトニー滝谷に続くわけだが、その恋がそれまでの彼と、いかに懸隔があるか、いかに奇異なことであるか、が強調される効果を果たす描写でもあるのである。

## おわりに

ショート・ヴァージョンの不足をロング・ヴァージョンで補強するのは当然の創作過程であるが、『トニー滝谷』の場合、ロング・ヴァージョンc1 (全作品<sup>⑧</sup>) で増補して委細を尽くしたにもかかわらず、筆が滑りすぎたり饒古すぎるくらいがあるところをロング・ヴァージョンc2・3 (単行本・文庫本) で削除していることが判る。

しかも削除だけではなくc12・3で増補加筆やまとめなおししているわけである。それでもここまで見てきたように、作品の前半については比較的ロング・ヴァージョンc11(全作品⑧)の増補改訂が、ほぼそのままロング・ヴァージョンc12・3(単行本・文庫本)にも継承されていることも判る。前稿<sup>⑦</sup>で見たようにアシスタントの応募女性などの場合もその傾向は強かった。だが、委細を尽くしたはずのロング・ヴァージョンc11(全作品⑧)の表現に大幅なカットや細部の改訂については、本稿でも見てきた通りである<sup>⑧</sup>。

ロング・ヴァージョンc11(全作品⑧)の増補については、ショート・ヴァージョンと大筋は変わらない中、ショート・ヴァージョン(b11・2)の増補が主であることは拙稿群で見えてきた通りである。心中思惟も含め、最も詳細な描写を保有することも本文批評によって判明してきたと思う。そしてそれらを割愛することであるべきものを表現の背後に沈め、ロング・ヴァージョンc12・3(単行本・文庫本)が最終稿として出されてきたことも、である。

今回言及出来ない事柄やまとめについては続稿としたい。

## 〈注〉

- (1) 拙論『トニー滝谷』の本文改訂(一)―シャネル削除による人物造形―「解釋學」六七輯(平二五・三三)、『トニー滝谷』の本文改訂(二)―ショート・ロング両ヴァージョンそれぞれの本文異同―「解釋學」七三輯(平二七・三三)、『全作品⑧』所収『トニー滝谷』本文の性格・定本との差異とその独自性が意味するものと―「解釈」六一巻七九号(平二七・八)、『トニー滝谷』の本文改訂(三)―全作品⑧本文の性格・統一五二箇所七九個の本文異同一覧―「表現學」三三号(平一九・三三)、『トニー滝谷』の本文改訂(四)―番外編・トニー谷と滝谷親子、その同時代性―「解釋學」八一輯(平二九・一一)、『トニー滝谷』の本文改訂(五)―ショート・ロング両ヴァージョンの上海関係についての描写―「表現學」四号(平三〇・二D)、『トニー滝谷』の本文改訂(六)―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(1)―「表現學」五号(平三二・三三)、『トニー滝谷』の本文改訂(七)―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(2)―「表現學」六号(合一・三三)、『トニー滝谷』の本文改訂(八)―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(3)―「表現學」七号(合三・二D)。

(2) 前掲『トニー滝谷』の本文改訂(五)―ショート・ロング両ヴァージョンの上海関係についての

描写―「表現學」四号(平三〇・二D)。

(3) 前掲『トニー滝谷』の本文改訂(六)―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(1)―「表現學」五号(平三二・三三)。

(4) 前掲『トニー滝谷』の本文改訂(四)―番外編・トニー谷と滝谷親子、その同時代性―「解釋學」八一輯(平二九・一一)。

(5) 前掲『トニー滝谷』の本文改訂(三)―全作品⑧本文の性格・統一五二箇所七九個の本文異同一覧―「表現學」三三号(平一九・三三)。

(6) 前掲『トニー滝谷』の本文改訂(六)―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(1)―「表現學」五号(平三二・三三)。

(7) 前掲『トニー滝谷』の本文改訂(八)―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写(3)―「表現學」七号(合三・二D)。

(8) ショート・ヴァージョンを増補してロング・ヴァージョンとなるのだが、旧稿でも指摘したように『全作品⑧』の本文は五二箇所七九個にも及ぶ改訂をされ『単行本』(c・2)『文庫本』(c・3)の本文となる。したがって、定本的本文としては、『全作品⑧』ではなく、現在のところ文庫本『レキシントンの幽霊』が決定版本本文なのである。しかし、『全作品⑧』の本文は、旧稿や本稿でも言及するように『トニー滝谷』をよりよく理解するための増補改訂であるにもかかわらず、旧稿以外、問題にされずに来てしまっている。旧稿でも触れたが、『英語で読む村上春樹 TONY TAKIYANU』(平一五・一〇)平二六・三三、NHK出版の底本も『全作品⑧』であるし、英語版『短篇集』めくらやなぎと眠る女の日本語版が平成二二年に新潮社から刊行されたが、その底本も『全作品⑧』である。国内でもテキストの改変には注視されてはならず、たとえば、『トニー滝谷』の初出は雑誌『文藝春秋』一九九〇年六月号、同作が一年後『村上春樹全作品1979〜1989』に収録される際にも再び全作品版に微修正が施され、一九九六年一月短篇小説集『レキシントンの幽霊』に再度収録される際にも再び全作品版に微修正が施された。(藤井省三氏『村上春樹のなかの中国』六一巻七九号(平二七・八)、『トニー滝谷』の本文改訂(三)―全作品⑧本文の性格・統一五二箇所七九個の本文異同一覧―「表現學」三三号(平一九・三三)でも指摘した通りである。



